

痛覚から築く人文・社会科学：屋嘉比収さんの生の在りよう

鹿野，政直

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究

(巻 / Volume)

38

(開始ページ / Start Page)

263

(終了ページ / End Page)

271

(発行年 / Year)

2012-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008002>

痛覚から築く人文・社会科学——屋嘉比収さんの生の在りよう

鹿野 直

屋嘉比収さんが亡くなって一年余、あまりに早いその他界への痛嘆は、わたくしを捉えて離さないばかりでなく、いまでも途切れることなく、人びとから届いてくる。

あれはたしか、去年（二〇一〇年）の九月下旬であった。沖縄文化研究所で仲程昌徳さんの講演をうかがったの帰途、ばったり出会った大里知子さんから、屋嘉比さんのご体調をみて、氏の二冊のご本『沖縄戦、米軍占領史を学びなおす』と『近代沖縄』の書評会を開きたいと、戸邊秀明さんや我部聖さんと相談中との話を聞いた。あのご労作を、若い世代がどのように受けとめ、継承してゆこうとするのか、心はずむ話題であった。計報に接したのは、それから旬日を経ずしてである。掛け替えないひとが喪われたとの思いが衝き上げ、また、お仕事への遺された抱負がいかにかりであろうかとの念が駆けめぐった。

これからの沖縄近代史研究・思想史研究にとって、タクトを振えるただ一人の、といって言い過ぎとされるのであれば（氏に寄せられていた厚い信望を含めて、言い過ぎとは思わないが）、少なく

とも最適の一人であった。しかも、ご自身も編者の一人を務められたシリーズ『沖縄・問いを立てる』全六冊が示しているように、若い研究者たちが鬱然たる層を成してきていて、共同研究への機は明らかに熟しつつあった。そのうえ、基地問題に凝縮して発現する沖縄の状況が、歴史にその根元を探究する要請していた。研究の機と沖縄の状況という二つの「現在」が呼応しつつ、探究作業のかなめとして屋嘉比さんを、おのずからにして推したてつつあったことは、遠くからでも窺えた。

いや、沖縄に根をもつ人間としての義務感と、近現代史・思想史を主題とする研究者としての職責感を相乗化したかたちで、そういう要請をもっとも全身的に受けとめていたのが、屋嘉比さんご自身であったことは、言うを俟たない。もとより氏は、そんなことを言い立てるのからもっとも遠いお人柄であり、ただ当然のように、身を挺して探究への実践に踏みこんでゆかれた。そうでなければ、時論に研究にと、しかも両者を構造的に連関させて、あれほどの活動を誰がなしたであろう。ご発病後も、その活動が豪も減速しなかったことは、今回、作成者たちから恵与された我部聖・戸邊秀明確認『屋嘉比収著作目録』（二〇一二年五月）と、若林千代監修、我部聖・戸邊秀明協力『屋嘉比収の仕事展』資料集（二〇一一年六月）に、まざまざと見てとることができる。

わたくし自身、屋嘉比さんに、共同研究を主宰してくださいと、お願いしてきた一人であった。課題は山積しているが、とくに復帰運動とその思想の再検討は欠かせない、心の血を流す作業になるでしょうが乗り出してくださいと、希望したこともあった。それが実現したら、許されれば屋嘉比さん

の振るタクトのもとに、(枯木も山の賑いとしてであれ) 馳せ参じるつもりでもいた。

その屋嘉比さんが逝ったのである。もたらされた空白の大きさに言葉を失うとともに、あまりに誠実に課題と取り組もうとなさったこと、ないしわたくしたちが過重なご負担を求めたことが、ご発病への遠因にもなったかと、悔やまれてならない。

屋嘉比さんの個人史については、ほとんど知るところがない。しかしその書かれるもののインパクトは強烈であった。沖縄戦を不拔の軸として、沖縄近現代史・思想史を刺し貫く構想が、ここに結実しつつあると思った。その目配りは広く、ポスト・モダンの学説の摂取をもないがしろにできなかったが、その尺度によって沖縄を裁断することなく、むしろ逆に、沖縄を「より見える」存在とするため、それを自在に活用した。沖縄に生を享けた人間として氏は、沖縄びとが沖縄びとのまま、自他ともに解放に至る途を、歴史に学ぼうとして揺るがなかった。「歴史の教訓」「歴史や記憶に学ぶ」という類の言葉に、わたくしたちは屋嘉比さんの文章で幾度出合ったことであろうか。

『沖縄戦、米軍占領史を学びなおす』という著書に接したとき、折からの「問いなおす」ばやりのなかで、「学びなおす」という語を立てられた新鮮さ・決然さに心打たれた。「問いなおす」が、自分を軸として歴史を対象化しており、その限りで自分への問いが皆無なのにあいし(「読み解く」にも若干似たような語感がある)、「学びなおす」には、身を沈め、みずからを歴史のなかに引き出す意志があると思った。

たまたまそのご本の書評を求められていて、この点を詳しく書くかうとしたものの、そうした比較に踏み込むこと自体、あのご労作を「汚す」行為になりかねないと思い返し、実際には、『問いなおす』としてもよい表題を『学びなおす』としたところに、「引き受けねばならない」とする著者の責務感が如実に表れている」とするに止めた。すると著者からの返信に、この箇所についてこうあった（引用はご遺族のお許しをいただいた）。

（沖縄戦についての文章を書いた後にはいつも―引用者）「おまえは本当に沖縄戦のことを知っているのか」という自らへの問いが澱のように沈殿してきて、自分自身の中で沖縄戦を〈学びなおす〉ことの必要性を痛切に感じておりました。（中略）もちろん、修正主義に対する反発や危機感もあります、わたし自身が沖縄戦に関する文章を書きながらも、新たな事実や証言を突きつけられることにより、いかに自らが沖縄戦について知らないかを痛感せざるをえず、そのため必要に駆られて沖縄戦について〈学びなおす〉ことをしなければならなかったというのが実態です。

いかに骨の髄から歴史に学ぼうとしているかを、端的に示す言葉として、わたくしは、氏の志の高さにあらためて敬意を深くした。

氏にあつては、片言隻語といえども、この精神から生み出されないものはなかった。いや、この精

神あつて初めて、しかも痛苦をわが身に引き受けつつ、言葉はその結晶として書き留められたといふべきであろう。

いわく、「沖繩からの基地撤去の闘いは、たんなる観念論ではなく、米軍基地に起因する暴力や日本軍の暴力に対して、絶望の淵から立ち上がった女性や韓国のハルモニが訴える『人間の尊厳』の声に誠実に応答する行動である」(「この間の問いと希望(下)〈リレー連載・沖繩と10年16〉」『沖繩タイムス』二〇〇五年十一月十五日)。

いわく、「米軍占領下という厳しい状況下の中で、多くの沖繩住民は、自分たちの命を自分たちの手で守るための行動を起こした。私たちは、今度こそ、その沖繩戦後史の歴史や記憶に学ばなければならぬ」(「リレー連載・米軍ヘリ墜落 炎上する沖繩で考える5」『沖繩タイムス』二〇〇四年八月二十九日)。

いわく、「奴隷とは、自分が奴隷であることさえも自覚していない状態をさすという。その意味で、私たちは、いまなお『奴隷』なのだ」(「リレー連載・問われる民意1」『琉球新報』二〇〇六年四月一八日)。

いわく、「いったい沖繩にとって『日本国民』とは何なのか」(「復帰38年 基地を問う 日本を問う(下)」『琉球新報』二〇一〇年五月一四日)等々(以上いずれも、『屋嘉比収の仕事展』資料集所収)。もう三十年近くまえになるが、わたくしは、女性史のアカデミズムへの参入を果たたとされる女性

史総合研究会編『日本女性史』全五巻にたいし、編集代表者が「女性史は応用問題」と書いていることにシヨックを受け、また本文一六三四頁に及ぶこの大作に『青鞥』を論じた部分が、（刺身のツマ然とした）二頁を除いて皆無な点に、女性解放の初心に発した女性史の、アカデミズム化にともなう「痛覚」の欠落」を指摘したことがある。この批判は、くだんの編集代表者からの反批判を受けたが、わたくしとしては、いわゆる学問化が、本来それへの起点をなしたはずの、自己を含めた状況への痛覚と、往々にして背反関係をもたらすとの認識は揺るがない。

屋嘉比さんの学問を考えようとして、はからずも大むかしのこのエピソードを想起したが、それは一にかかって、氏の学問が、いかに研鑽を積もうともけっして痛覚を手放さないという特質をもち、わたくしの理解する『日本女性史』の場合と鮮やかな対比をもつて浮びあがるからである。いや、氏の学問は、精緻化するほどに、初心を成す痛覚によって検証され、その結果によって不断に更新されていった。どの一言、どの一行も、体内を濾過せずに発せられることなく、そのことが、氏の学問への信頼を培い、同時に吸引力を高めた。

痛覚に発して屋嘉比さんが創りあげていった人文・社会科学を、沖縄びととしての自覚に支えられ沖縄を直視した学問というのは、必ずしも難しくはない。しかし郷土人であることと、研究者≠真実の探究者であることは、アプリアリに調和的な関係にあるものではない。両者を抱えこんでいたために、氏には、両者間での、人一倍苦しい葛藤が、おそらくつねに渦巻いていた。伊佐眞一さんの労

作『伊波普猷批判序説』（影書房、二〇〇七年）への書評のかたちを執った『伊波普猷批判序説』と現在」（『沖縄タイムス』二〇〇七年九月一八日、同題のリレー連載の第2回）に、そうした葛藤と、そこでのみずからを賭けた選択が、もつとも端的に示されていると、わたくしは読んだ。

そのなかで屋嘉比さんは、伊佐さんの伊波普猷批判を、「いま伊波普猷の発言をどう読むべきか、という現在に生きる私たち一人一人への重い問いかけ」と受けとめつつ、こんな思索を繰りひろげている。まず氏は、カミュの、「もし戦争状態のなかで、正義や道義といったものと自分の母親の生命のいずれかの選択を迫られたならば、自分は迷うことなく母親を撰ぶ」という問いと認識を示し、それへのサイドの、「そのような問いは選択肢の設定自体が誤り」で、「選択を迫られているのは、正義と真実に対する知識人としての責任を貫くか、それを偽るかのどちらか」だという批判を対置して、それを手がかりにいう。「ここで、カミュの問いの中の『自分の母親の生命』という語句を、『沖縄への愛郷心』に置き換えてみると、論点がはっきりと浮かび上がってくる」（伊波たち―引用者）『沖縄の知識人』に問われていたのは、『郷土沖縄』を思う愛郷心などではなく、『知識人』として『正義と真実に対する責任を貫くか、それを偽るかのどちらか』だったのだ。そうして一挙に結びへと向う。「それは、今日においても同様である。いまも『沖縄の知識人』に問われているのは、沖縄への愛郷心などではなく、サイドの言うように『弱い者、表象Ⅱ代弁されない者たちと同じ側に立ち』『権力に臆することなく真実を語る』姿勢である」と。

沖繩を掛け替えない存在としんそこ思っていたにも拘らず、いや、そう思っていただけに屋嘉比さんは、沖繩に「居直る」ことができなかった。氏のそんな姿勢は、『沖繩戦、米軍占領史を学びなおす』の「はじめに」の自問に、明瞭に打ち出されている。「私たち戦後世代は、非体験者であるにもかかわらず、沖繩に生まれ育たという〈特権〉により、体験者の体験にもたれかかり、その視線で安易に語りすぎているのではないか」、「問われている緊要なことは、非体験者としての位置を自覚しながら、体験者との共同作業により沖繩戦の〈当事者性〉を、いかに獲得していくことができるかにある」。痛覚から築く人文・社会科学者ならではの言葉だと思うとともに、その言葉が繰り込まれるまでの内面の葛藤に想到せずにはいられなかった。

わたくし個人に即した経験としては、望外のご厚意に浴したとの思いのみつよい。二〇〇八年、わたくしのささやかな論集のために、友人たちがシンポジウムを開いてくださったさい、送られてきたプログラムに、沖繩を主題とする三・四巻の報告者として屋嘉比さんのお名前をみいだしたときは、破格のご厚意に驚愕し、感激がこみあげた。だが、それもつかのま、ご発病との氏からの来信は、わたくしを打ちのめした（伊佐眞一さんが、代りを務めてくださった）。その秋深く、沖繩にうかがったさいには、ご病中にも拘らず、新城郁夫さんとともに、議論の場を設営されたばかりか、みずから報告を買って出られ、その後の懇親会にも司会を務めてくださった。予期しないことの連続に、恐縮のほかなく、ご病状を思いつつも、ご厚情を受けるほかなかった。

相見での交わりは、そのほか二、三と、ごく淡いものである。が、少なくともわたくしのなかでは、屋嘉比さんはつねに、沖縄を主題とする場合はもとより、そのほかの主題に向うさいも、もっとも繁く心のなかで応答を重ねたいひととしてあった。昨秋、沖縄文化研究所での講義をお受けし、準備を進めるさいにも、はたして氏の批判に堪えられるかが、いちばん強く念頭に被さった。その屋嘉比さんはいまや亡い。とはいえ、氏とはこれからも応答を重ねたいとの気持は、自己点検のためにも、募つてやまないものがある。今秋その講義が、研究所の屋嘉宗彦所長のご幹旋で活字化されるとすぐ、わたくしは氏の作品を読み返し、ありうべきご批判をそこに求めた。するとやわらかな声での、しかし痛烈な批判が返ってきた。「やはり見方が一国主義的ですね。もっと東アジア的視野を内化しないと、沖縄は見えませんよ」。

(二〇一一年一〇月一八日)